

コンピューターと人間の狭間を意識しよう

当 HP の「『サイボーグ技術が人類を変える』を見て」を目にした若いメル友から、早速「人間の究極の存在理由というか、再定義が必要になるとは、どういうこと？」とメールが来た。

いつものように、厚かましく、差し当たって次のように返信した。

【 簡単に解り易く模式的に云えば、人は、外界の変化を感覚系で受信し、それが電気信号として脳（中枢神経系）に伝わり、その処理、調整、働きが電気信号として運動系を動かす。その過程である感覚系→中枢系→運動系→感覚系→中枢系→運動系のサークル様のフィード・バック機構が働いて自らの行動を調整している。

つまり、人は何を感じ、どう思い、どう行動するかは、全て脳の働きによる。それが周りの人にはその人の行動として観える。

また、体の部位は、臓器移植、補助具等で代替えが可能な時代。ただ、脳だけは臓器移植出来ず、代替えは不可能というのが従来の考え。

しかし、移植できなくても脳の一部の働きにしろコンピューターが代替え出来るとなると、その人固有の脳の働きって何か？ということになり、つまり人間って何か？ということになりますよね。

感覚系に代わりコンピューターの送り込む電気信号通りにその人の脳が運動系（行動）をコントロールできるようになると、その人固有の脳の働き（中枢系）とは言えなくなる。脳を操るコンピューターの出現の時代、その人固有の脳の働き（その人の究極の存在理由・意味）とは、何か、どういうことか、ということにもなります。

「我思う、故に我あり」と云ったのはデカルトだったかな。

コンピューターに組み込まれた電気信号では代替えできない、コントロールできない「我」とは何か、どういうことか。つまり、「人間の再定義」が必要になるのでないか？ということです。

まあ、いつものように勝手な大雑把な自分流に云えば、「我（自己意識）」は、周りの人との関係性、双方性でこそ存在、意識できることと思うので、こればかりは、プログラム通りに作業するコンピューターは苦手な領域かなと思うのですが……。こうしたコンピューターと人間の狭間を意識しようとするのこそ、人間の業かもね。

人との関係性を拒否しがちな人は、コンピューターに取って代わられるかもよ（笑）。】

（2005 年 11 月 8 日 記）